

連載 オブジェクト指向と哲学 第 85 回 デカルト、炉部屋の夢(4)

河合 昭男

<http://www1.u-netsurf.ne.jp/~Kawai>

明治の初めころ、それまでの日本になかった哲学や科学／技術などに関する多数の概念が西洋から一度に入ってきた。該当する日本語がなく、それら外来語の訳語が作られた。現在我々が普通に使っている哲学／科学／技術に関する多数の翻訳語もそのころ作られた。

西周（にし あまね 1829 - 1897）は幕命でオランダに留学し、多数の西洋概念を持ち帰りました。「百学連環」は西周の講義録を書籍にまとめたもので、それら多数の翻訳語とその説明がなされています。幕末津和野藩の御典医森一族の生まれで、軍医としてドイツに留学した森鷗外（1862 - 1922）とも親戚関係にあります。

●百学連環 - Encyclopedia

百学連環には Encyclopedia という英語のタイトルが付けられています。encyclopedia は普通「百科事典」と訳されていますが、西周は「百学連環」という言葉を作りました。原文冒頭を以下に示します。

--

英國の Encyclopedia なる語の源は、希臘の Εγκυκλιος παιδεια なる語より來りて、即其辭義は童子を輪の中に入れて教育なすとの意なり。故に今之を譯して百學連環と額す。[1] p464

--

このギリシャ語、エンキュクリオス・パイディアと読みます。その意味を[1]より引用します。

--

Εγκυκλιος

丸い／定期的な、毎年の／通常の、日常の／一般的な、全般的な

παιδεια

1. 養育

2. 訓育、教育／鍛錬／教育の結果身についたもの、教養

3. 躰、懲戒

4. 幼少時代／（集合的に）若者達

--

「童子を輪の中に入れて教育なす」と「百學連環」という訳が繋がりません。Εγκυκλιος (エンキュクリオス) は『古代ギリシアにおいては「円環を成す」というよりは、「普通の」「日常の」という意味を担っていた』[1] つまりエンキュクリオス・パイディアは「基本的な教養課程」、「一般教養」を意味し、それらは中世になって自由学芸（リベラル・アーツ）と呼ばれるようになった。自由学芸は自由七科とも呼ばれ、その内容は文法／修辞学／弁証論／算術／幾何学／天文学／音楽です。これらを修めたのち医学／法学／神学などの専門分野に進みます。それを西周は「円環をなした教養」と捉えて「百學連環」と訳した。（[1]より要旨まとめ）

●デカルト第3の夢

第3の夢の中で机の上に辞書が現れます。この「辞書」という言葉はオリジナルの唯一の訳者であるバイエの訳によるものですが、デカルトのノートには辞書ではなくエンサイクロペディアに当たるラテン語だったのではないかという説があります。

--

眠り込んだデカルトは、最初の書物と共に、もう一度仕事机に戻ってくる。バイエはこの書物をフランス語で「辞書」と呼んでいるが、そのために後の部分が曖昧になってしまうのである。

（省略）「エンサイクロペディア」という意味のラテン語 – 当時、デカルトがその統一的原理に気づいていた諸科学の連鎖と関連がある言葉 – を復元することができるからである。[2] p81

--

●辞書とエンサイクロペディア

辞書とエンサイクロペディアの言葉の違い、現在の辞書（OXFORD 現代英英辞典）には次のように説明があります。

--

dictionary

A book that gives a list of the words of a language in alphabetical order and explains what they mean.

encyclopedia

A book or set of books giving information about all areas of knowledge or about different areas of one particular subject, usually arranged in alphabetical order.

--

つまり辞書は言葉とその意味の説明を与えるもので、エンサイクロペディアは知識の全領域または特定のテーマの様々な領域の情報を与えるものです。

●デカルトのエンサイクロペディア

デカルトはエンサイクロペディアをどのような意味で使ったのか。フランス啓蒙思想のディドロ (1713 - 1784) やダランベール (1717 - 1783) などの百科全書派が活動するのはまだ 100 年先のことなので、リベラルアーツ的な意味だったのか。言葉とその意味を説明する辞書を越えた学問体系という意味か。デカルトは、根拠の曖昧な既存の知識を一旦捨て、絶対に確かな知識を積み重ねて全ての学問体系を構築すべきだと考えた。『一生に一度は、すべてを根こそぎくつがえし、最初の土台から新たにはじめなくてはならない』[4]と省察 1 の冒頭にその決意が述べられている。夢の中ではわずか 1 冊の本として現れているが、辞書ならともかくエンサイクロペディアと呼ぶならそれは第 1 巻かまたは総目録なのか。

バイエは、デカルトは第 3 の夢に出てくる「辞書」を「総合された学問」と解釈したとしています。[3] ならばこれは「辞書」ではなく、やはり「エンサイクロペディア」の方がふさわしい。

以下次回...

参考書籍

- [1]山本貴光、「百学連環」を読む、2016、三省堂
- [2]ジュヌヴィエーヴ ロディス=レヴィス、デカルト伝、1998、未来社
- [3]田中仁彦、デカルトの旅／デカルトの夢、2014、岩波現代文庫
- [4]デカルト、【訳】井上庄七／森啓／野田又夫、省察／情念論、2002、中公クラシックス